

形容詞配列と階層性： 日英における統語構造の比較と認知言語学的考察

石田 崇*・松谷 緑

Cognitive Constraints on the Adjective Order in English and Japanese

ISHIDA Takashi, MATSUTANI Midori

(Received September 25, 2015)

1. はじめに

英語を学習するものは、その学習過程において多種多様な形容詞を目にする。英語が上達するにつれて、表現力が増し、名詞句において複数の形容詞を用いようとする際、その配列をどうするかは気になる点である。形容詞の配列順序は一見自由度が高いと思われがちであるが、実はそうではなく、ある一定の法則が存在する。しかしながら、そういった形容詞の配列についての考察は、語用論や統語論の中でも扱いは少なく、その法則に関しては未だかつて明確な論拠が示されていない。日本人英語学習者においても、まず、教えてもらうことはなく、あったとしても、おおまかな説明を受けて終わっている場合がほとんどであろう。そこで、本稿では、統語構造と認知的視点から、英語における形容詞の配列順序について、日本語の形容詞と比較しながら考察する。

2. 英語の形容詞の配列順序

形容詞の配列順序には明確な規則があるというわけではないが、機能という視点から形容詞を観察してみると、おおまかな原則が浮かび上がってくることがわかっている。安井他（1976: 138）によると以下のような一般的な型が出来上がる。

- (1) 限定詞 < 同定の形容詞 < 強意の形容詞 < 特性記述形容詞 < 分類形容詞 < 名詞

まず、同定の形容詞 (identifying adjective) は、(2)の例文における *same* である。同定の形容詞は強意の形容詞 (intensifying adjective) に先行する。(強意の形容詞はこの場合 *real* である。)

- (2) the same real hero
* the real same hero

(安井他 1976: 137)

同定の形容詞は2つに分類することが可能で、*the very person*, *the exact information*, *his first*

* University of Nottingham, School of English 大学院在籍

book, the above diagram, the last student, the only one, the opposite side のように定冠詞で唯一のものと限定される場合の完全同定と、*a similar mistake, an analogous fashion, a synonymous reading* などのように不定冠詞による部分的限定による部分同定がある。さらに強意の形容詞は2つに分類される。主要語の名詞が持つ一定の意味特性を強める機能を持つ、名詞強意の形容詞には *an utter incompetent, a true poet, a perfect man* などがあり、一方、主要語の名詞よりも限定詞と深いかかわり合いを持つ、限定詞強意の形容詞には *a certain girl, a particular student* のようなものが挙げられる。

次に強意の形容詞と特性記述形容詞 (characterising adjective) の2つの配列順序について考えてみると、この2つの形容詞が共起不可能であることがわかる (e.g. **a mere small child, *a real tall man*)。ただし、くだけた口語体では、共起する場合もあり、その場合は強意の形容詞が特性記述形容詞に先行する。

特性記述形容詞と分類的形容詞 (classifying adjective) の2つを考えると、前者が後者に先行することが(3)の例からわかる。

- (3) a. a small silken handkerchief
 * a silken small handkerchief
 b. a big British ship
 * a British big ship
 c. an interesting serial story
 * a serial interesting story

(安井他 1976: 137-138)

安井他 (1976: 138) は、同定の形容詞と強意の形容詞が入れ替わることは絶対にありえないことであるが、特性記述形容詞と分類的形容詞の入れ替わりは可能であり、その場合意味の相違が認められるとしている。

これら形容詞の中には同一の類の形容詞間の配列が可能であるものもあるが、それらはかなり恣意的であると思われる。しかし、より好まれる順序 (preferred order) というものが存在する。例えば、同定の形容詞の場合、

- (4) certain other main reasons
 * the other certain main reasons
 * the main other certain reasons
 * certain main other reasons

(安井他 1976: 138)

certain, other, main はいずれもすべて同定の形容詞であるが、これらの中に一定の配列順序関係が生じていることは明らかである。

強意の形容詞に関しては、2つ以上のものが等位接続で結ばれることはありえないため、問題は起こりえない。

特性記述形容詞の配列順序はかなり複雑である。安井他 (1976: 139) はおおまかに分類するとして、1) 話者の主観的評価あるいは判断を表す形容詞 (e.g. *tall, beautiful, fat, large,*

small, etc.) 2) 客観的に決定される新旧を表す形容詞 (e.g. *old*, *new*, etc.) 3) 同じく客観的に決定される色彩形容詞の3つに分けている。そして、これらは以下のように限定的位置に現れるのが通例とされている。

(5) 主観的形容詞 < 新旧を表す形容詞 < 色彩形容詞 < 名詞

(安井他 1976: 139)

さらに、このクラスの形容詞の中で、*old*, *young*, *little*は特別の扱いが必要で、通例、名詞に最も近い位置に置かれるが、これらの形容詞が共起する場合は、*little*が*old*や*young*に先行するとしている。ただし、色彩形容詞が用いられる場合は、(5)に示したように、色彩形容詞が主要語の名詞に近い位置に置かれる。すなわち、以下の例において、(6a)だけが規則に則っており、他の選択肢は基本的に認められない。

- (6) a. a beautiful little old white table
 b. *a little beautiful white old table
 c. *a beautiful old little white table
 d. *a white beautiful little old table
 e. *an old beautiful white little table

(安井他 1976: 140-141)

安井他 (1976: 141) は、形容詞の配列順序にはリズムなど他の複雑な要素が複合的に絡んではくが、話者の主観的判断を示す形容詞が、客観的に観察され、認知が可能である客観的判断を表す形容詞に先行すると考えてよいとしている。言い換えれば、客観的に観察、認知可能なもの、すなわち名詞の内在的本質的特性を表わしている形容詞の方が名詞に近い位置に置かれる。さらにこの他にも、分詞 (e.g. *interlocking*, *crumbling*, *paved*, *sparkling*, etc.) や名詞的形容詞 (e.g. *English*, *Japanese*, *Gothic*, etc.) などについても考察している。以上のことを総合すると、(7)のような配列順序を認めることができるという。

(7) 同定の形容詞 < 強意の形容詞 < 主観的形容詞 < 新旧を表す形容詞 < 色彩形容詞 < 分詞 < 出所やスタイルを表す名詞的形容詞 < その他の名詞的形容詞 < 形容詞用法の名詞 < 名詞

(安井他 1976: 144)

小稲 (1958: 110) は、2つ以上の形容詞が1つの名詞を修飾するときの順位として、「(形容詞の用法の) 代名詞 (または名詞の属格) + 数量形容詞 + 性質形容詞」の順で並べ、特に性質形容詞が2つ以上ある場合には、大小、形状、性状、新古、材料・所属の順によるが、名詞と結合して1つの不可分の観念をあらわすものはその直前に、意味上名詞との関係が遠いものに関しては遠い位置に置くのが原則であると述べている。また、デクラーク (1994: 484) は、特性記述形容詞について、特性、大きさ、形、年齢 (新旧)、色彩、起源、材料の順序をとるとし、「名詞の指示物の内在的特性、あるいは、目に見える特性を表す修飾要素が、できるだけ名詞に近い位置に置かれる傾向」を指摘している。安藤 (2005: 481) は「主要語と関係の深い、

特殊なものほどその近くに置かれ、意味が一般的になるにつれて主要語から離れていく傾向がある」と述べ、評価、寸法、年齢・温度、形状、色彩、分詞、出所、材料の順を示している。以上のように、一部、形（状）と年齢（新旧）の順序については見解が分かれるようであるが、英語における形容詞の配列順序の傾向性にはある程度共通した指摘が認められる。

3. 日本語の形容詞の配列順序

英語に比べ、日本語の形容詞は配列順序の法則に縛られていないと言えるだろう。例えば、

- (8) a. 大きな赤い風船
b. 赤い大きな風船

この2つの句を聞いても、日本語話者はあまり違和感なく理解することができる。というより、むしろ、違いを意識しろといわれても、どのような基準で違いを意識すればいいのか、発話の文脈や状況を踏まえたうえでなければ、判断できないであろう。しかし英語では前のセクションでみたように、その語順は(7)のような法則に沿って、制約がある。

- (9) a. a big red balloon
b. [?]a red big balloon

法則により、(9a) は一般的な表現であるが、(9b) は不自然であると同時に法則を無視している表現と言える。ただし、これはあくまで無標な (unmarked) 表現であるという前提における考察であり、文脈や場面に応じて意図的に有標な (marked) 表現を用いる場合は必ずしも間違っているとは限らない。が、ここでは無標の場合を前提として考察を進める。

日本語の形容詞には英語にない特徴がある。そのひとつが名詞とのつながりにおける語尾変化である。例として、「い」形容詞と呼ばれるものを観察する。

日本語の形容詞の用法は英語とほとんど変わらないが、述語の中においては形容詞だけで述語となり得る点が英語の構文とは異なる。

- (10) 空は青い。 The sky is blue.
君は美しい。 You are beautiful.

空西 (1994: 120) によると、英語の形容詞には時の観念がなく、したがって *blue* や *beautiful* は「今青い」「今美しい」を意味していない。さらに、「青かった」「美しかった」にあたる英語の形容詞も存在しない。つまり、連結詞 (copula) が必要なのである。日本語の「い」形容詞はこの点で英語とは違う。形容詞そのものが時の観念を持つというのである。

- (11) a. 暑い。 It is hot.
b. 暑かった。 It was hot.
c. 暑い夏 hot summer
d. 暑かった夏 summer that was hot

空西 (1994: 120-121) は、英語の形容詞には、speechの中で他の要素につながる形態的なしるしがないと述べている。例えば *book* では、a book | books となるが、これに *thick* (厚い) を加えても a thick book | thick books となり、*thick* の形態は変化しない。

(12) a thick book 厚い本

(13) The book is thick その本は厚い。

(空西 1994: 121)

(12)では限定用法 (attributive use)、(13)では叙述用法 (predicative use) である。空西 (1994: 121) はイエスベルセンが(12)の構造をjunction、(13)の構造をnexusと言っていることをとりあげ、英語のnexusにはcopulaが必要であるが、日本語には必要ないことにも言及している。日本語の「い」形容詞はそのまま現在形として用いられ、修飾語にもなるし、述語になることもできる。日本語の形容詞には他にも「な」形容詞があり、大きく「い」形容詞と「な」形容詞に分類される。空西 (1994: 133) は「貧しい人々 (「い」形容詞)」「貧乏な人々 (「な」形容詞)」はどちらも内心構造の名詞群を作っており、それに対して「人々は貧しい。」「人々は貧乏だ。」は外心構造の文であると述べている。

日本語は英語に比べ、形容詞の配列に関してあまり制約が厳しく働いていないように思われる。しかし本当にそうであろうか。例えば、2つの形容詞を両方とも「い」形容詞で配列するとどうであろうか。

(14) a. 大きい白い雲

b. 白い大きい雲

この2つを比べてみるとどちらがより自然な表現であろうか。両者の違いが感知されるとすれば、そこには「い」形容詞の連続したリズムの影響と英語に見られるような認知的構造の順序の規則が作用しているように思われる。このように見ると、英語においても日本語においても我々の認知システムによる無標操作が深く関わっていると言える。次の (15a) (15b) のように特定の形容詞を「な」形容詞や (15c) (15d) のように「く形」を用いれば配列順序の無標性がどちらの場合にも適う。

(15) a. 大きな白い雲

b. 白い大きな雲

c. 大きくて白い雲

d. 白くて大きい雲

このように、表現に多様性が許される場合、その表現の選択は話者が雲の特性に関してどういった部分に焦点を当てているかによると思われるが、そのことを即座に判断し理解するのはかなり難しい。そういった意味では、日本語は柔軟でかなり自由度の高い形容詞配列順序を持つと同時に、その表現において、曖昧かつ多様な解釈を多分に有するという2つの側面を持っていると言えるのではないだろうか。

4. 形容詞の範疇化

Aljović (2010: 40) は、2つ以上の形容詞の配列順序の法則について2点述べている。

There are two related features of multiple adjectival modification. First, cross-linguistically, multiple attributive adjectives show basic, neutral, or unmarked, orders as opposed to marked as well as free orders. Second, when adjectival modification shows hierarchical properties, we observe a contrast between unmarked and marked orders (stacked adjectival modification) .

形容詞における階層性は、異なる言語においても決して他の文法的機能や統語規則から逸脱したのではなく、それらと同じように人間の認知活動における主観や客観的事実に基づいて配列が行われている。

Rosato (2013: 13-15) は、形容詞の配列順序に関する先行研究の考察を踏まえ、コーパスデータや談話における発話の音調的特徴も考察したうえで、意味論的、認知的視点から配列順序に関して述べている。特に談話における配列順序のエラーに関する分析は興味深い。*big red house* と *red big hat* の比較において音調面でピッチの違いが観察され、後者においては *big* を発話する際に前者より若干ピッチが下がることを実験から得ている。このことから、話者が一般的原則から言えば *big red hat* と述べるべきところに一種のエラーを起こしており、このエラーは *hat* の実体として2つの形容詞を聴覚的に調整し分解していることを意味しているとす。また、Rosato (2013: 15-18) は、British Councilが英語教育で形容詞の指導を行う場合に、次のような配列順序を推奨していることについて部分的修正の可能性を論じている。

- (16) 1. general opinion
2. specific opinion
3. size
4. shape
5. age
6. color
7. origin (nationality)
8. material
- (noun)

この順序で問題となるのは、例えば始めに挙げている2つの要素である。generalなものは例えば *nice* や *interesting* であり、specificなものは *beautiful* や *curious* である。*beautiful* より *interesting* たらしめるものは一体何であろうか。まして、*nice* を generalなものとして扱うことは困難ではなからうか。このような問題を挙げながら、Rosatoは(17)のように新たな形容詞の配列順序を提案している。

- (17) 1. scope-taking (take all adjectives) (alleged, former, nice)
2. size (big, small, fat, skinny, tall, short)

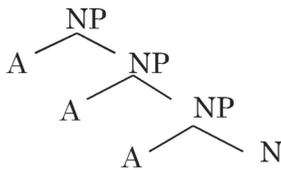
3. quality (formerly “specific opinion”) (beautiful, ugly, silly, * little, * young)
 4. age (old, new)
 5. shape (square, round, rectangular)
 6. color
 7. origin (nationality)
 8. material
- (noun)
- * Adjectives such as “little” and “young” can be a part of multiple categories, although not simultaneously.

Rosatoはこのような配列順序は一見恣意的であるように思われるが、意味の範疇化が、より大きな特質の範疇へと統合されていると述べている。そして、これらの大きな範疇は下位範疇におけるspheres（領域、階層）の核に位置する名詞とともに概念化される。つまり、名詞に近い3つの要素であるcolor, origin, materialは物質の物理的存在としての本質を示しており、それより遠い位置にある要素たちは、段階的に本質的内容を含まなくなっていると言える。したがって、我々はcolor, origin, materialの3つの要素を形容詞の結びつく先の核となっている名詞の最も深い部分で範疇化していると言える。

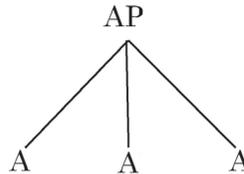
5. 形容詞の階層性

安井他（1976: 149-150）は形容詞が2つ以上用いられる場合の配列順序は、それらが等位構造をなす場合と累積的構造をなす場合の2つがあると述べている。ちなみに限定用法の場合は、2つのいずれかであるが、叙述用法の場合は等位構造しかもない。（18a）は累積的構造、（18b）が等位構造である。

(18) a.



b.



（安井他 1976: 149）

安井他（1976: 158-163）は無標の形容詞配列が操作される場合、つまり意図的に有標の形容詞配列を選択する場合については、その順序を入れ替えることによって文体的効果に差は現れるが、意味上の実質的变化はないとしている。しかし、形容詞間に階層性が認められる場合には、意味上の相違がみられるのが通例であると説明している。例えば、*beautiful, red, houses*の3語の配列について考えてみると、*beautiful red houses*が一般的な配列順序であり、これまで見てきた(5)や(7)のような規則に沿っていることから、無標の配列順序（unmarked order）と呼ばれる。それ以外の配列は文脈に制約された配列順序（contextually constrained order）と呼ばれる（i.e. *red beautiful houses*）。形容詞の階層が意味に関与するのは、文脈上の前提条件やそれに伴う強勢などの外的要因が参与してくる場合であるが、形容詞間に階層が認められる

場合、修飾される名詞そのものが持つ意味上の概念構造をより限定するような役割を果たす。有標配列である *red beautiful houses* は(5)のような配列に関する階層規則に沿って考察すれば、無標配列である *beautiful red houses* に比べ、文体的差異だけでなく意味上の差異も見られる。つまり、形容詞の階層に意図的な操作を加え、色彩形容詞 *red* が主観的形容詞 *beautiful* に先行することにより、話者の主観が無標配列の場合よりも深く関与し、家々に関する赤色の占める割合や、赤色に対する知覚と印象度合い、美しさの評価や観点において、有標な表現として意味上の相違を生む。

6. まとめ

2つ以上の形容詞の配列順序は、基本的には無標的順序 (unmarked order) で表される。しかし、形容詞間における階層性が存在するとき、無標と有標における文体的、意味的差異を見ることが可能であることがわかった。我々は、与えられた文脈上の複雑な前提条件によって特定の名詞に関係する多様な形容詞を詳細に範疇化していると言える。

形容詞の配列順序が恣意的であるかについては、決してそうとも言えないように思える。なぜなら形容詞が名詞を修飾する順序としてこれまでの考察から、以下の理由が挙げられるからである。まず、形容詞が結びつく先の核となる名詞の本質に近いものから名詞の前に置く傾向があり、物理的存在としての本質を範疇化している。次に、無標の配列順序 (unmarked order) を選択する場合と、文脈に制限された配列順序 (contextually constrained order) において、あえて有標的表現を好んで使用している場合がある。その際、形容詞の階層性によって意味上の相違が見られ、それに伴う前提条件や発話の際の音調面での事実、強勢の位置などの外的要因が深く関わっている。

以上のように、複数の形容詞が修飾する場合、主要語である名詞の内在的本質的内容に関して名詞自体が持つ意味レベルでの情報構造という視点から形容詞の機能と配列順序を構築していることが観察され、形容詞配列はその文法化の過程と実際の使用における慣用によって定められている。その複雑な操作を瞬時に行っているのが、我々人間の認知システムの一端といえるであろう。

参考文献

- 安藤貞雄 (2005) 『現代英文法講義』 東京：開拓社
 デクラーク、レナート (著) 安井稔 (訳) (1994) 『現代英文法総論』 東京：開拓社
 Aljović, N. (2010) 'Syntactic Positions of Attributive Adjectives.' in P.C. Hofherr and O. Matushansky, (Eds.), *Adjectives: Formal Analyses in Syntax and Semantics*, 29-51. Amsterdam, Philadelphia: John Benjamins Publishing.
 影山太郎 (編) (2009) 『日英対照 形容詞・副詞の意味と構文』 東京：大修館書店
 小稲義男 (1958) 『現代英文法講座 第2巻 冠詞・形容詞・副詞』 東京：研究社
 Rosato, E. (2013) 'Adjective Order in English: A Semantic Account with Cross-linguistic Applications.' Dietrich College Honors Theses. Paper 189.
 空西哲郎 (1994) 『英語・日本語』 東京：紀伊国屋書店
 Truswell, R. (2004) 'Attributive Adjectives and the Nominals they Modify.' M. Phil thesis, University of Oxford.
 安井稔 他 (1976) 『現代の英文法 第7巻 形容詞』 東京：研究社